

第3章

那須塩原市の歴史文化の特徴

第3章 那須塩原市の歴史文化の特徴

1 地区別の歴史文化の特徴

本市の歴史的成り立ちについては、旧行政区分に立脚した地区区分により整理されてきたことから、旧行政区分による各地区の歴史文化の特徴を記載します。

(1) 黒磯地区

黒磯地区は、那須野が原の北東部を南東に流れる那珂川沿いの低地にあります。地区内の上黒磯と上厚崎には、室町時代中期以前と推定される年代の板碑があります。この板碑は上黒磯は東北系、上厚崎は関東系に属し、関東と東北文化の交錯地帯の板碑としてその分布上からも貴重なもので、周辺は中世より集落が営まれていたと考えられます。近代になって新陸羽街道（現国道4号）及び東北本線黒磯駅ができ、交通の要所・中心市街地として発展してきました。

黒磯地区は、旧村名では黒磯村（幕府領）・鳥野目村（大田原藩領）・小結村（大田原藩領）・上厚崎村（幕府領）・下厚崎村（幕府領）の範囲に当たります。

鳥野目村・小結村は、那須野が原北部にあり、一部は南東へ流れる那珂川沿いの低地と段丘に位置しました。南に入会原野の大輪地原（那須東原）が広がります。

下厚崎村は那須野が原中部にあり、地下水が深く水利に乏しい場所でした。しかし、大仁田、小仁田と呼ばれる深さ2m足らずの浅い井戸2つがあり、地質の関係で干ばつの時でも水が涸れなかったといわれています。天正19年（1591）の「那須資景知行目録」（那須文書）には、「下あつさき」が見え、近世は初め那須藩領でしたが、寛永20年（1643）から幕府領となりました。温泉神社と雷神社があります。

市街地には、大正7年（1918）に建築された高木会館（旧黒磯銀行本店）があります。黒磯銀行は、黒磯に本店を置く初の銀行として大正7年（1918）9月に開業しました。



黒磯駅前商店街風景



黒磯郷土館と旧津久井家住宅



下厚崎の獅子舞



高木会館(黒磯銀行本店)

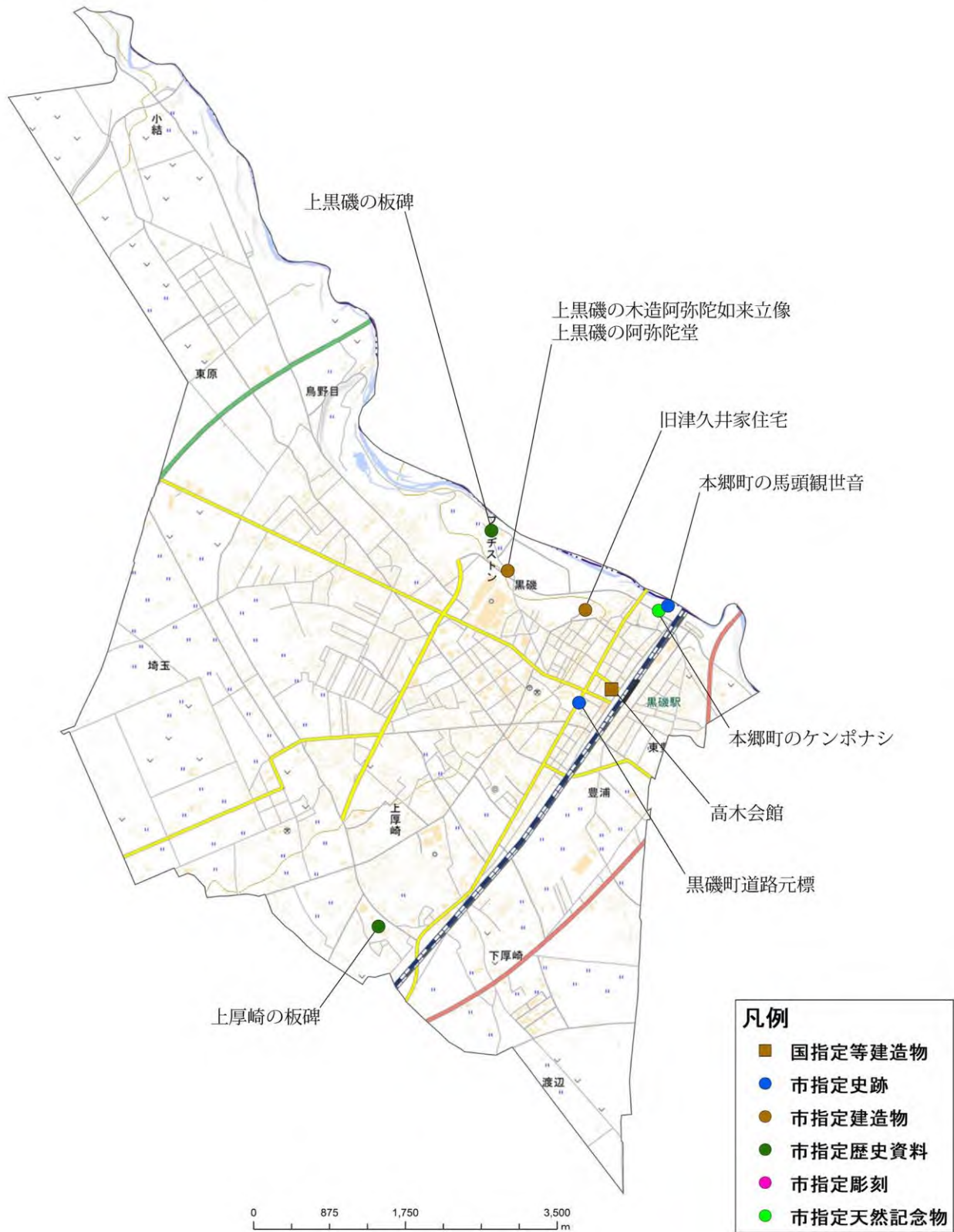


上黒磯の阿弥陀堂



上黒磯の木造阿弥陀来立像

■ 黒磯地区の指定等文化財分布



※国土地理院標準地図を加工して作成

(2) 鍋掛地区

明治22年(1889)市町村制度施行後、鍋掛村となった地区です。この地区は、17世紀初頭整備された奥州道中の宿場として発展してきました。宿場は、那珂川を挟む形で右岸に鍋掛宿(幕府領)、左岸に越堀宿(黒羽藩領)が隣接し、2宿で1宿の機能を果たしていました。

幕末期の記録では、鍋掛宿の町並みの長さは5町余(約554m※)、家は68軒、旅籠が23軒、本陣が1軒、脇本陣が1軒、問屋が2か所あり、人口は346人でした。越堀宿の町並みの長さは4町半余(499m※)、家は113軒、旅籠が11軒、本陣が1軒、脇本陣が1軒、問屋が2か所あり、人口は569人でした。

鍋掛宿の入口を奥州道中(県道72号)を大田原方面へ300mほど進んだ場所に鍋掛の一里塚が残ります。この一里塚は日本橋から41里にあたりますが、昭和40年代に土砂採掘により南の塚が消滅し、さらに平成6年(1994)の道路整備により北の塚も消滅したため、現在残るのは11mほど西に移動し復元した塚です。この一里塚の50mほど奥に鍋掛神社があります。

鍋掛宿入口には清川地蔵が祀られ、さらに250mほど進むと、松尾芭蕉が元禄2年(1689)に黒羽から高久へ向かう途中で詠んだといわれる「野を横に馬牽むけよほととぎす」の句碑があります。句碑の北側に建つ真言宗智山派の正観寺には、明治初頭の地方行政組織の制度を物語る資料である戸長役場印が保存されています。

越堀宿の真言宗智山派の浄泉寺には「從此川中東黒羽領」と刻まれた黒羽領境界石が残っています。

越堀から寺子に向かう途中の杉渡戸には、江戸時代後期の南画家高久靄厓の墓があります。靄厓は谷文晁の門下で、渡辺華山・椿椿山・立原杏所らと並ぶ画家として名声を博しました。靄厓の作品4点が市指定有形文化財として那須野が原博物館に所蔵されています。

寺子交差点付近にはかつて日本橋より42里の一里塚がありましたが道路整備工事により消滅し、現在は復元した塚一基が残されています。寺子交差点の北300mに建つ会三寺は真言宗智山派の寺院で、境内には元和元年(1615)の創建と伝えられる地蔵堂があり、中には本尊の木造地蔵菩薩立像と百一体地蔵菩薩が安置されています。

旧奥州道中が余笹川に差しかかる手前には寺子の地蔵尊が祀られています。この地蔵尊は信州高遠石工の作で、栃木県内では最古・最大のものといわれています。

※1町は江戸時代の110.88mを使用した。



正観寺のシダレザクラ

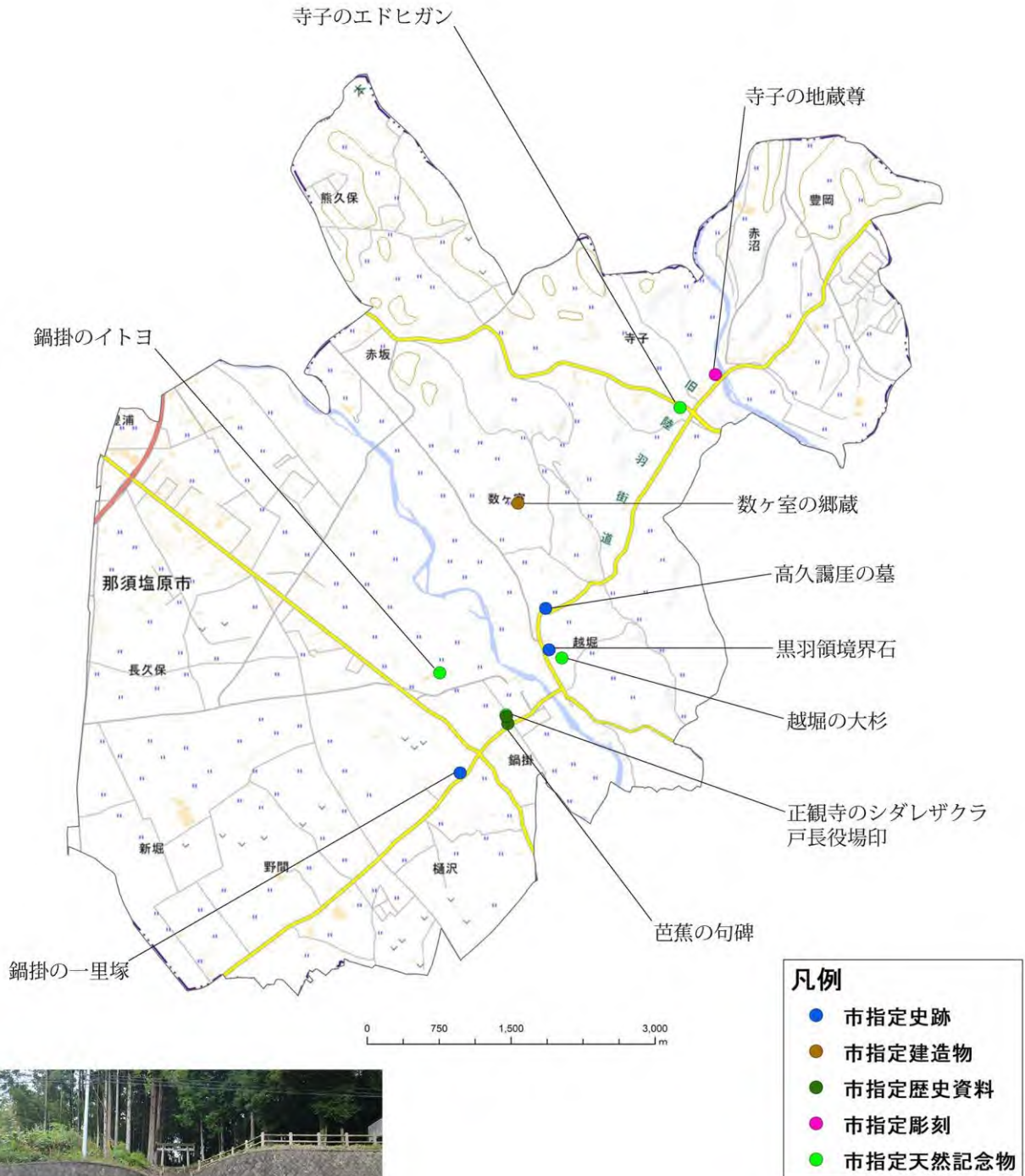


芭蕉の句碑



寺子の地蔵尊と石塔類

■ 鍋掛地区の指定等文化財分布



鍋掛神社

※国土地理院標準地図を加工して作成

(3) 東那須野地区

明治 45 年 (1912)、東那須野村の一部であった旧黒磯地区が分離して黒磯町となったことにより、現在の東小屋・大原間・沼野田和・木曾畑中・下中野・島方・上中野・笹沼・北和田・中内・上郷屋・塩野崎・鹿野崎・唐杉・前弥六・杓掛・上大塚新田・三本木・北弥六・波立^{ほったち}・無栗屋・山中新田・佐野開墾の 23 地区が東那須野村となりました。那須野が原の東部に位置するので東というのではなく、明治 22 年 (1889) の町村制施行時に、那須野が原開拓に伴い、西那須野村が成立したのに対して、東と称しました。源頼朝の那須野巻狩は、この地区にも及んだと伝えられています。

大原間は 16 世紀頃よりその名が見られ、承応 2 年 (1653) 遷宮の温泉神社があります。

東小屋は原街道に面した集落で、天正 19 年 (1591) 「那須資景知行目録」に「東こうや」と見られます。法真寺^{ほっしんじ}は、元和元年 (1615) の開基といわれ、浄土宗芝増上寺の末寺であり、市指定文化財の「木造菅原道真座像」や「木造阿弥陀如来座像」があります。

沼野田和是那須塩原駅の南方、扇状地と丘陵 (稲荷山) から成り、南西部を熊川が流れています。東那須野公園により湧水が保全されていて、天正 19 年 (1591) 「那須資景知行目録」には「ぬまのたわ」と記されています。区域には金乗院^{こんじょういん}奥の院地藏堂などの指定等文化財があります。

木曾畑中は南が吉際 (現大田原市)、西は熊川を隔て下中野、北は沼野田和に接していて、古くは木曾村と畑中村に分れており、寛永 15 年 (1638) 以前に合併して木曾畑中村となったと伝えられます。元禄郷帳に村名が見え、幕府領であり、奥州道中鍋掛宿の助郷村でした。文化 7 年 (1810) 開削の山口堀が通っています。

下中野は、天正 18 年 (1590) と推定される大田原晴清の「知行方目録」に「下中野」と見えます。奥州道中大田原宿の助郷村でした。昭和 10 年 (1935) には県北最初の電力利用による地下水の揚水に成功、その後一大水田地帯となっています。

北弥六は、近世の初め是那須藩領、寛永 20 年 (1643) からは幕府領となり、明治に至りました。正保 4 年 (1647) 熊川上流から巻川用水が開削され飲用水としました。文化 7 年 (1810) 山口堀が開削されています。名主は代々室井家が務めました。同家はもと那須氏家臣で、一時は近郷 10 か村を兼帯する有力名主であり、「室井記」が知られています。歴史文化資源では、阿弥陀供養塔・真言宗智山派密乗院弥六寺・八幡神社・愛宕神社・天神宮などがあります。唐杉は、寛永 20 年 (1643) の「両弥六小屋村年貢割付状」に村名が見え、同年那須藩領から幕府領となりました。昭和 13 年 (1938) 北部の一部が陸軍飛行場の用地として買収され、太平洋戦争後には埼玉第 2 開拓地となり、同 28 年 (1953) には塩野崎新田となりました。



法真寺の木造阿弥陀如来座像



東小屋の木造菅原道真座像



峯薬師の仁王門

■ 東那須野地区の文化財分布



- 凡例**
- 市指定史跡
 - 市指定建造物
 - 市指定歴史資料
 - 市指定古文書
 - 市指定無形民俗文化財
 - 市指定彫刻
 - 市指定天然記念物



室井家の四脚門

※国土地理院標準地図を加工して作成

(4) 高林地区

高林地区は、市内の北側の平地から山間部に位置しています。明治22年(1889)に成立した高林村を範囲とし、高林・箕輪・木綿畑・鳴内・湯宮・百村・箭坪・油井・板室・西岩崎・亀山・洞島・細竹・青木開墾・戸田開墾の15地区から成り、当時は役場を高林に置いていました。

江戸時代の百村・木綿畑・湯宮・鳴内の4地区は、四か村と称して一団を成し、巻川温泉神社は、長年共同で祭礼を行っていました。いずれも幕府領であり、板室及び三斗小屋が黒羽藩領、その他は幕府領と大田原藩の領地になっていました。

百村は百村山の麓、那須扇状地の扇頂部にあり、那須野が原北端部から帝釈山地にまたがり、標高は500m前後あり、那珂川の上流支流の木ノ俣川、大蛇尾川・小蛇尾川、熊川上流の大巻川などが南東へ流れています。天授6年(1380)菊地四郎兵衛という者により開かれたと伝えられ、戦国期百村の者は野武士として那須氏のもとで戦ったことなどが『那須記』に記されています。

正保4年(1647)、熊川上流から大原間村方面に流れる巻川用水が開削され、後に百村新田の飲用水に利用されました。宝暦13年(1763)頃には、穴沢地区で飲用水を得るために木ノ俣川から穴沢用水を開削しました。巻川温泉神社の祭礼その他を共同で行い、また黒滝山頂に黒滝権現を祀り盛んに参詣しました。かつては馬の飼育も盛んで、関連する碑塔類も多く見ることができます。

百村の百堂念仏舞は国選択無形民俗文化財です。念仏踊りの一種で、かつて盆中に農耕儀礼的なものとして行われてきたもので、たくさんのお堂にお参りして奉納したところから、この名が生まれたといわれています。以前は旧暦7月15日に村のはずれや辻、光徳寺の境内などで舞われていましたが、大正2年(1913)上演後に中断していました。しかし、関係者の努力により昭和34年(1959)から翌年にかけて復活し、現在は4月29日に行われています。

板室地区は、江戸時代の会津中街道の整備や塩沢(現在の板室温泉地区)の温泉により発展し、現在に至っています。地域内には戊辰戦争の戦場跡も残っています。

現在では一部が日光国立公園内に含まれ、沼原湿原など自然環境の豊かなところとして板室温泉をはじめ観光地としても人気を集めています。



木の俣地蔵



板室本村の湯本道標

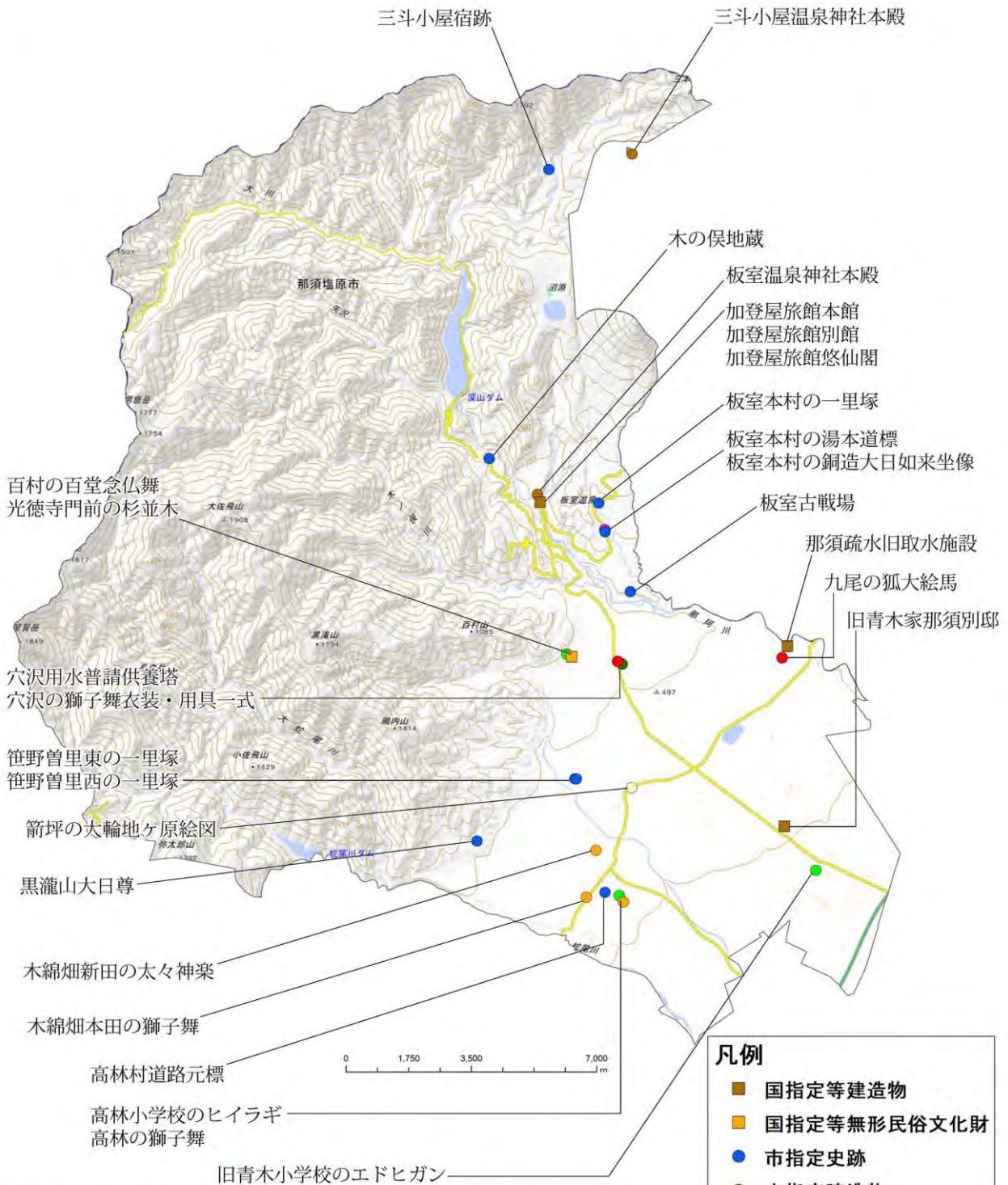


板室古戦場



光徳寺門前の杉並木

■高林地区の指定等文化財分布



板室温泉街



百村の百堂念仏舞

※国土地理院標準地図を加工して作成

(5) 西那須野地区

西那須野地区は、かつての那須開墾社と大山農場が位置する地区です。この地区は那須野が原開拓の中心地帯であり、華族をはじめ地区内外の実業家等の大農場による開拓が進められ、那須疏水の完成を契機として開拓を担う移住者が急増し、やがて村ができ、明治22年(1889)町村制の実施により西那須野村となりました。

西那須野地区の歴史文化資源は、近代開拓関係や華族などに関わるものが多いのが特徴です。

現在の一区町から四区町・千本松・二つ室は、那須開墾社(後年解散、千本松農場、矢板農場などに分轄)の範囲に属しました。地区内には、烏ヶ森の丘、那須開墾社烏森農場跡をはじめ、関八州大測量の起点(観象台)など近代開拓の歴史を示す指定等文化財が広がっています。那須野が原を見下ろすことができる常盤ヶ丘の山頂には、那須野が原開拓の大恩人である印南丈作をはじめとする那須開墾社関係者の墓碑が並んでいます。

松方^{まさよし}正義が開設し、現在は観光牧場として人気の高い千本松牧場や国の研究機関農研機構(国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構)の畜産研究部門の畜産飼料作研究拠点などが広く展開して、往時の草地景観を保持しており、大規模開拓農場の形を残しています。

西那須野駅を挟んで西側の永田地区と東側の下永田地区は、元勲大山巖と西郷^{じゅうどう}従道の共同経営による加治屋開墾場によって形成された地区といえます。大山・西郷の影響力により東北本線が当地域を通るようになったと考えられ、明治19年(1886)開業の那須駅(現西那須野駅)周辺は急速に市街地化が進みました。

加治屋開墾場分割により、下永田地区は大山農場の区域となりましたが、戦後の農地改革により多くは小作人などに解放され、残った土地も、後に県や西那須野町に売却・寄附され、現在の文教地区(高等学校2か所、小学校1か所、公民館1か所)に姿を変えました。関連する歴史文化資源は大山農場の往時の姿を残す大山記念館や大山参道、赤レンガなどがあります。



千本松の観象台



観象台の几号水準点標石



那須開墾社烏ヶ森農場跡



那須開墾社烏ヶ森農場跡
(土塁)

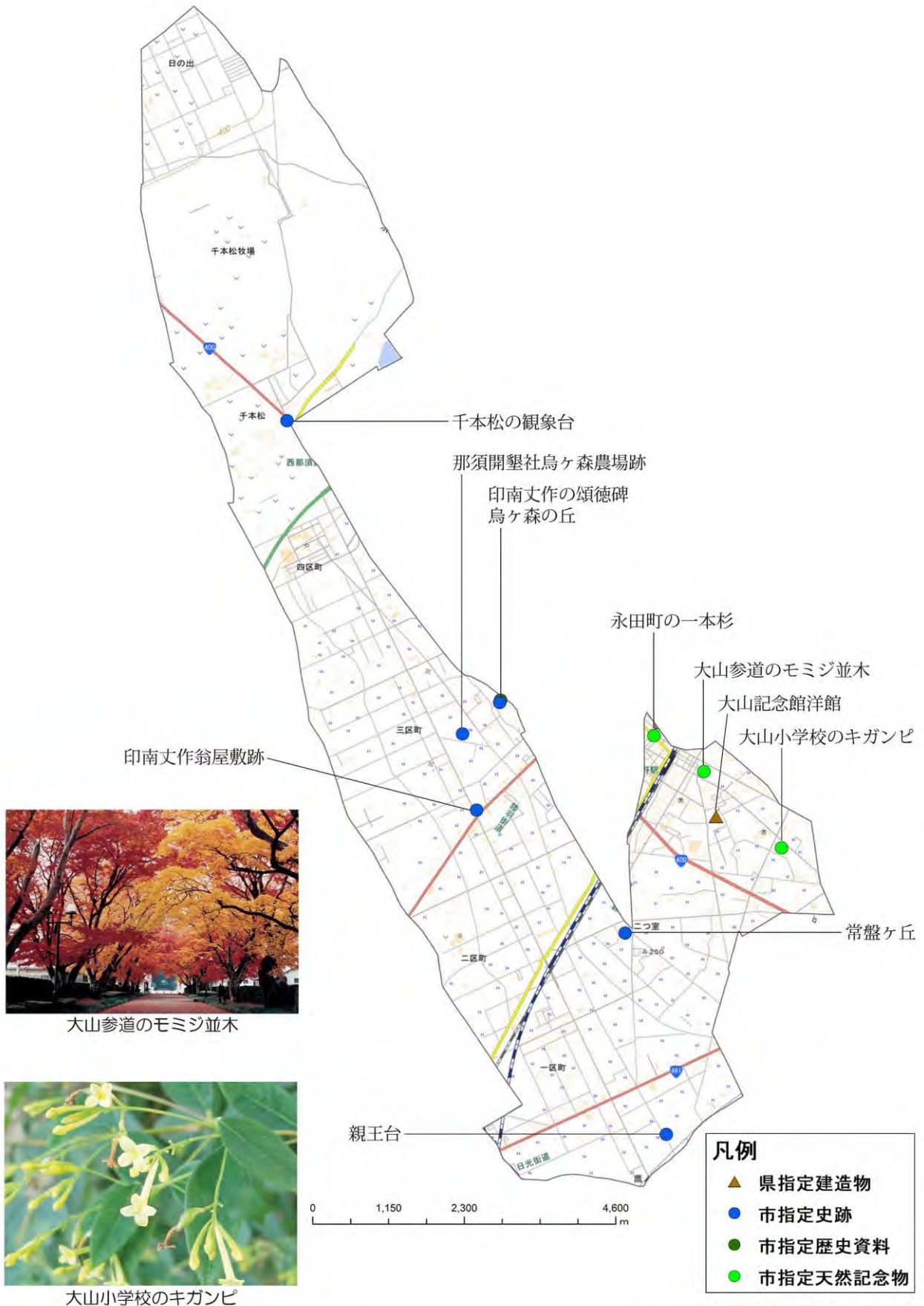


常盤ヶ丘



親王台

■西那須野地区の指定等文化財分布



※国土地理院標準地図を加工して作成

(6) 狩野地区

狩野地区は古くから村落が成立した東部地区と、明治の開拓によって成立した三島・太夫塚・南郷屋の一部から成ります。

東部地区は井口・西富山・高柳・関根・東関根・西遅沢・東遅沢・槻沢から成り、中央部には古くは小規模な湧水点が点在して縄文時代の大規模集落が営まれました。後の鎌倉時代では、源頼朝の那須野巻狩が本地区及び東那須野地区を中心地として行われたものと考えられ、以来狩野郷が起ったと伝えています。一説によると、狩野郷は上郷・下郷の二つがあり、上郷はほぼ現在の東那須野地区に該当し、下郷が本地区に当たっていると考えられています。江戸時代以前から湧水地（出釜＝谷頭）を中心に集落が立地して農業が営まれ、街道筋の助郷などの役割を果たしてきました。

槻沢では、国指定重要文化財となった深鉢形土器をはじめとする、槻沢遺跡の縄文土器群があります。今から 5,000 年前の東北と関東の交流を裏付けるもので大変貴重な資料です。近くの井口にも大きな集落遺跡が確認されていて、湧水地という地の利を得て古くから人々が生活を営んでいたことが分かります。江戸時代には広範囲な検地が実施され現在に伝わる地名が見られるようになります。以降江戸時代を通じて小規模な集落が各所に営まれ今日に至ります。

また、石林地区には、かつて陸軍大将乃木^{まきすけ}希典が別荘を構えました。その別荘と、乃木の死後、住民の要望により創建された乃木神社が現在も残っています。

三島地区は、肇耕社（後の三島農場）を中心に開拓された地区で、西那須野駅北側に位置します。整然と碁盤の目のように区画された街区は、農場主であった三島通庸の都市計画の構想を今に伝えています。現在は JR 西那須野駅・国道 4 号による交通の利便性から人口集中地区として宅地化が進んでいます。

三島農場は、薩摩藩出身で栃木県令も務めた三島通庸を実質的な代表とする「肇耕社」が明治 13 年（1880）に設立され、明治 19 年（1886）に三島個人の所有となり次第に拡大していきました。現在の那須野が原博物館は、この三島農場の事務所敷地に立地しています。博物館には近代の開拓に関わる資料が集積されており、展示などを通して活用されています。開拓に関わる近代遺産として三島通庸を祀る三島神社などがあります。



槻沢小学校の大モミジ



高柳の温泉神社の工ノキ



乃木神社（拝殿）



三島農場事務所跡
（那須野が原博物館）



槻沢遺跡出土の縄文土器



三島通庸の肖像画

■ 狩野地区の指定等文化財分布



鑿道八景 第7景
下野塩谷郡那須川独橋有三架



鑿道八景 第8景
下野那須郡三島村平野放牛

凡例	
■	国指定等建造物
■	国指定等考古資料
▲	県指定史跡
●	市指定絵画
●	市指定史跡
●	市指定古文書
●	市指定考古資料
●	市指定有形民俗文化財
●	市指定無形民俗文化財
●	市指定彫刻
●	市指定天然記念物

※国土地理院標準地図を加工して作成

(7) 塩原地区

塩原地区は市内西部の山間地に位置し、温泉街を有することで広く知られています。地区のほぼ全てが日光国立公園に含まれ、箒川の溪流と山地の自然豊かな地区です。塩原（要害）城跡・狭間城跡・離宮城跡の中世の山城跡も残されています。江戸時代には宇都宮藩に所属しており、藩主が湯治に赴いたという記録もあります。近世初頭から、中心地の移動はありましたが温泉地として栄え、江戸時代には儒学者などが多く訪れ、それぞれ紀行文などの記録を残しています。近代には、三島通庸による新道開削により交通の便が良くなり、明治時代には、華族をはじめ政治家や名士、文人たちがこぞって長期滞在し、別荘を設けました。

地形に起因する特徴的な歴史文化資源として材木岩、塩原を形作った塩原湖成層（日本の地質百選）・新湯爆裂噴火跡などがあります。

建造物では、正和元年（1312）開山と伝えられる妙雲寺や、創建が大同2年（807）と伝えられる塩原八幡宮があるほか、多くの温泉神社が地区内に残っています。旧塩原御用邸新御座所は、三島通庸が建築した別荘を前身としており、現在は「天皇の間記念公園」として一般開放されています。

天然記念物では、国指定天然記念物である逆杉が知られており、推定樹齢は約 1,500 年といわれています。

指定無形民俗文化財には、足利市の堀込源太節の流れである上塩原源太踊りや、古代獅子舞、塩原平家獅子舞が保存伝承されています。



逆杉



旧塩原御用邸新御座所



温泉神社石幢



塩の湯温泉神社（本殿）

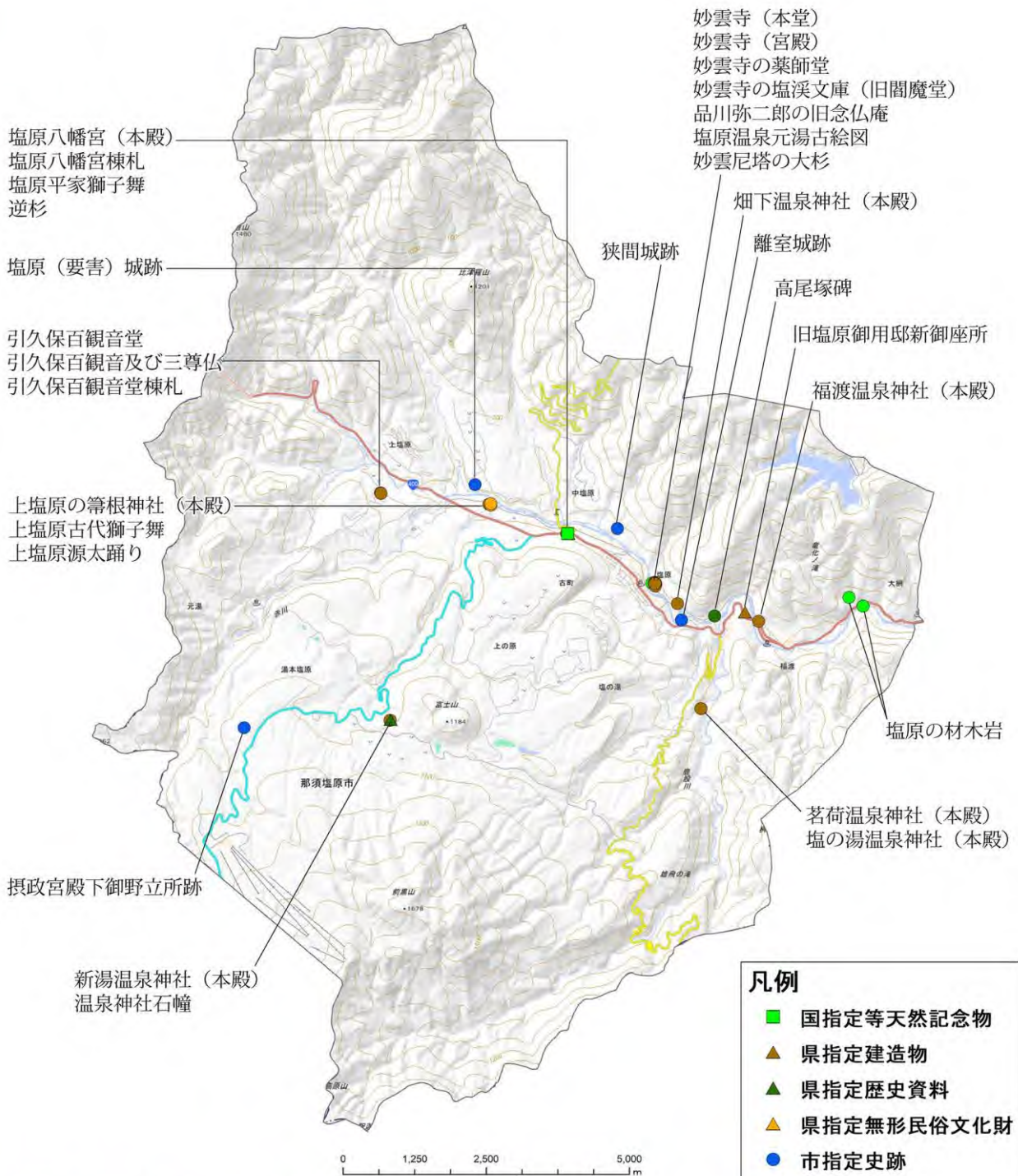


妙雲寺（宮殿）



上塩原源太踊り

■ 塩原地区の指定等文化財分布



上塩原古代獅子舞



塩原平家獅子舞

- 凡例**
- 国指定等天然記念物
 - ▲ 県指定建造物
 - ▲ 県指定歴史資料
 - ▲ 県指定無形民俗文化財
 - 市指定史跡
 - 市指定建造物
 - 市指定歴史資料
 - 市指定無形民俗文化財
 - 市指定彫刻
 - 市指定天然記念物

※国土地理院標準地図を加工して作成

(8) 箒根地区

箒根地区は、明治22年(1889)の町村制施行により、関谷村・金沢村・宇都野村・高阿津村・上大貫村・下大貫村・下田野村・折戸村・藁沼村・遅野沢村・上横林村・横林村・接骨木村が合併し塩谷郡箒根村として成立しました。地区内には7世紀に創建されたと伝えられる大田原城主の祈願所でもあった嶽山箒根神社があります。

金沢地区の国有地内には、塩原動物群の模式地として重要視される大黒岩化石層群があります。宇都野・金沢地区には鳩ヶ森城や野沢(真木)城の城跡が残ります。また、弥生時代の遺跡については確認されていませんが、関谷地区で発見されたといわれている弥生土器があります。金沢地区の和田山遺跡からは縄文後期の石棒・石剣・石鏃など多数が出土しています。

江戸時代には会津中街道の脇街道として関谷宿などが発展し、近代には塩原温泉郷の入口として鉄道の敷設や道路整備が行われました。塩原へ行啓途中の皇太子嘉仁親王(後の大正天皇)が休憩のため立ち寄った旧関谷小学校跡地には、それを記念する駐蹕碑が建っています。

指定無形民俗文化財には、関谷と上大貫の城鉾舞と、嶽山箒根神社の梵天上げが継承されています。

そのほか、藁沼から西那須野地区を経て大田原市へ流れる藁沼用水の旧取水口や、那須疏水の開削当時の施設の一部で、蛇尾川の地下を通すために設けた隧道である蛇尾川伏越など、水に関わる遺構も残っています。



塩原軌道「塩原口」駅舎跡



藁沼用水旧取水口



那須疏水旧蛇尾川伏越出口



関谷常夜灯



関谷の駐蹕碑



嶽山箒根神社梵天上げ

2 那須塩原市の歴史文化の特徴

那須塩原市の歴史文化は、北西部の山岳部の温泉地や、酪農地帯や田園地帯が広がる南東部の複合扇状地など、自然的・地理的環境との深い関係によって形成されました。縄文時代には比較的規模の大きな集落が営まれ、中世・近世になると東北と関東を結ぶ街道が開通し、宿場として発展してきました。そして、那須塩原市の近代を象徴するともいえる那須野が原開拓により、今日の那須塩原市があります。これらの自然的な環境や歴史的な事象等を、6つの特徴として整理しました。

(1) 大扇状地と海の記憶

那須塩原市は、那須野が原に属する南東部と帝釈山地に属する北西部から成ります。

那須野が原は、那珂川と箒川に挟まれ北西から南東に向って緩やかな傾斜を持つ台地で、日本の扇状地としては最大級のものとして知られています。

そのほぼ中央には蛇尾川と熊川が流れていますが、扇頂部から地下に潜ってしまい伏流しているため、普段は水無川となっています。蛇尾川、熊川を挟んで、明治初頭まで、東西に那須東原・那須西原と呼ばれた原野が広がっていました。

一方、市域の半分を占める北西部は東日本火山帯に属し、塩原溪谷に代表される豊かな自然と、塩原・板室・三斗小屋といった豊富な温泉に恵まれています。

また、那須塩原市の付近はかつて海の底にあったり、陸になっても湖があったりしたことから、塩原動物群や塩原湖成層といった地質学上貴重な自然的資源の観察も可能です。

市内に見られる豊かな自然風土は、大地が紡いだ歴史の物語といえます。

(2) 大扇状地に刻まれた歴史の歩み

那須塩原市には縄文中期の大規模集落である槻沢遺跡や井口遺跡をはじめとする数多くの遺跡が残ります。那須扇状地が生み出した湧水地近くには縄文時代の遺跡が存在しており、この地が豊かな自然の恵みを有していた証といえます。

時は流れ、鎌倉時代には那須野が原一帯で源頼朝による大規模な巻狩が行われました。那須野が原ならではの歴史絵巻です。

江戸時代に入ると、那須藩領、幕府領、黒羽藩領、大田原藩領、宇都宮藩領となりました。

また、戊辰戦争では塩原や板室、さらに三斗小屋において、旧幕府軍と新政府軍の間で激しい戦いがありました。

こうした歴史を物語る歴史文化資源が市内各所に残ります。

(3) 関東と東北を結ぶ道

栃木県北部地区は、古来より関東と奥州を結ぶ重要な交通の拠点でした。

江戸時代には五街道の一つである奥州道中が鍋掛・越堀を通り、宿場として発展していきました。また、廻米や特産物の輸送路として原街道が整備され、那須野が原を横断しました。

元禄8年(1695)には、会津藩の主要な道として三斗小屋・板室本村・百村本田・高林・下横林を通る会津中街道が開削されました。

明治に入り、三島通庸により塩原新道が開削されると、開拓地は一気に交通の要衝として変貌を遂

げます。明治19年(1886)には宇都宮～黒磯間に鉄道が開通。明治45年(1912)には、西那須野駅から関谷駅までの「塩原軌道」が開通し、その後、墓石まで路線を伸ばしました。

これら交通の発達、那須塩原市の経済的発展に深く関わるのです。

(4) 明治の大農場群と那須疏水

北西部の山地を除く大部分は那須扇状地の扇頂部と扇中部に位置し、水利の乏しい痩せた土地で、茫漠たる原野が明治初頭まで残されてきました。

明治に入り、原野を開拓するための大規模農場が次々と生まれます。それは、明治政府の殖産興業政策によるものであり、地元においては地域開発として進められました。開拓当初において、欧米型の大農法が取り入れられ、多くの農場で西洋農具や日本で改良された模造農具が使われました。

地元の結社農場とともに、華族の人たちの農場が数多く創設されました。40農場の内、華族農場は19を数え、面積的には50%を占めました。華族農場が、那須野が原の開拓をリードして行ったとみることができます。また、華族農場の存在は、国道や鉄道、そして那須疏水の開削というインフラ整備にも大きな影響を及ぼしました。

さらに、開拓に入った農場主の多くは、農場内に別邸を建設しました。那須野が原は、開拓地とともに避暑地としても注目され、それが塩原の別荘群と塩原御用邸とも結びつき、那須のリゾート開発の中でロイヤルリゾートとしての原点と位置付けられます。

那須疏水は、明治18年(1885)に本幹水路16.3kmが通水し、続いて4本の分水路が開削され、開拓地を潤しました。戦後、電気揚水の導入による水田化が進み、水田面積は飛躍的に増加しました。また、那須塩原市は戦後の開拓地となり、現在の酪農産業の隆盛へとつながっています。

(5) 那須扇状地の農村の暮らし

那須塩原市の市域の約半分は、那須扇状地の扇頂部から扇中部に当たり、大部分は田畑に適さないやせた土地でした。そのため、開拓地の現金収入の手段として黒磯地区・狩野地区では葉煙草栽培が、西那須野地区では養蚕が盛んに行われました。また、那須地方は古くから馬産地として知られており、農耕馬や軍馬の産地として第2次世界大戦終結まで主要産業に位置付けられていました。

那須岳や高原山から吹き降ろされる冬季独特の強風から家屋を守るため、屋敷林が設けられました。「ヤウラ」と呼ばれる防風林を備えた家並みが街道沿いに並ぶ列状集落は、この地ならではの特徴的な景観といえます。

そして、自然風土の厳しさを、季節の節目を生かした年中行事や祭礼、芸能などで乗り越えてきました。民俗芸能も、その地域の歴史と文化に根付いた貴重なものとして保存していく必要があります。

(6) 塩原・板室・三斗小屋の温泉群と山岳信仰

那須塩原市の特徴の一つとして、塩原・板室・三斗小屋の温泉群と山岳信仰の歴史があります。各温泉地には、それぞれに温泉神社が祀られていますが、社殿の彫刻類は繊細で見事なものばかりです。

塩原温泉は近世初頭より湯治場として栄え、明治に入り交通の便が良くなると、皇族をはじめとする名士や文化人がこぞって訪れ、独特の文化的発展を遂げました。

同じく湯治場であった板室温泉は、康平2年(1059)那須三郎宗重が発見したと伝えられ、江戸時代

にはすでに温泉の効能から「下野の薬湯」と呼ばれ、現在も湯治の里として親しまれています。

白湯山信仰、黒滝山信仰、嶽山信仰として山岳部に見られる修験道の影響は、明治に至るまで隆盛を見せましたが、近年衰退し、今は名残をとどめるのみです。

これら山間部において培われた歴史や文化は、平野部のものとは異なる那須塩原市のもう一つの側面であり、本市の歴史文化の多様性と魅力を物語るものです。